

| | |
|---------|-----------------|
| 漢法苞徳塾資料 | No. 058 |
| 区分 | 治療・灸法 |
| タイトル | 灸治療について |
| 著者 | 八木素萌 |
| 作成日 | 1990.09.16 入門講座 |

- ◎灸治療は「熱を補充」する治療である。従って「打膿灸」が津液の排出を目的とする事から「瀉」となるが、これ以外は「陽」「熱」を補充するものとなる。この点では鍼治療と趣が異なっている。『内経』や『甲乙経』に「陷下」する部に灸するとの指示が見られるのは、虚の部位と見なしていることが判かる。『傷寒論』に「火攻」を禁ずる記述が見られるが、「陽熱」「湿熱」の症候に禁じているのである。いずれも、灸は熱・陽を補充するものであるからである。
- ◎陽気の不足する場合に、滎穴を鍼で補しても効果が期待出来ない時には、灸を用いる事になる。「陷下」して「虚軟」で「ヒンヤリ」としている穴が施灸の対象部位である。「気虚」「気脱」の病症には重要な穴に施灸するとしばしば驚くべき効果を見ることが出来る。「痺」症は経筋的な症候である場合が大部分であって「燔鍼」が卓効するのであるが、灸頭鍼や施灸も効果は「燔鍼」よりも低い「燔鍼」に代わるものである。
- ◎『千金方』には1000壯とか年壯をすえている場合が見られる。良く知られている「逆子」の治療には『鍼灸聚英』に「至陰」穴が記載されているが、これは施灸である。右の「至陰」一穴で十分のようである。また「石野信安師の安産の灸」は「三陰交」一穴の施灸である。「中風七穴」も施灸が基本になっており、「食中毒の下痢」に裏内庭の灸や、「脚気八処の灸」も著名である。「モノモライ」には「二間」の灸は強力な効果を見せる、肺の邪実の為に痰が粘ってなかなか切れない時の「魚際」の施灸も効果が高いものである。灸治の穴は「合谷」「二間」などは鍼治の場合とは部位がやや異なるのは良く知られている。灸治の最も古い著作としては『明堂灸経』がある。
- ◎夏の暑い日や汗ばんでいる時には、「灸は熱い」と言われるが「熱・陽」が盛んな季節で、皮毛腠理にも夏の陽気盛んさが「ホテリ」としての現象を現わしている所に、「火熱」を加える事になる為である。『傷寒論』の「火ニテ攻ムルベカラズ」と指示している場合に相当しているからである。浮腫があって皮膚が如何にも薄い人・湿熱停滞の人は化膿しやすい傾向が見られる。
- ◎一般に「灸治」は慢性の難症に良いとされるが、病が痼疾化すると穴の圧痛反応はボヤケて判定しにくくなる傾向があり、背腧穴の反応も病が古ければ古いほど奥にひそみ、また脊柱寄りになるという傾向があるので、このような反応を触知でき、探し出せる「手」を作る事が大切になる。陰病・痼疾の診察の要綱を再確認しよう。